

●原著 2 : 第 4 4 回学術集会一般演題

# 夜啼・驚啼に対する 甘麦大棗湯の起源：医史学的考察

名古屋大学医学部附属病院小児科<sup>1)</sup>・公立瀬戸旭看護専門学校／公立陶生病院／Kこどもクリニック<sup>2)</sup>

川島 希<sup>1)</sup>・山口 英明<sup>2)</sup>

## Origin of Kambakutaisoto for Night Crying (Yatei) and Fright Crying (Kyotei): Research on the Medical History

Department of Pediatrics, Nagoya University Hospital<sup>1)</sup>・  
Seto-Asahi Public School of Nursing/Tosei General Hospital/K Kids Clinic<sup>2)</sup>

Nozomu Kawashima<sup>1)</sup>・Hideaki Yamaguchi<sup>2)</sup>

### 要 旨

夜泣き・睡眠時随伴症にそれぞれ対応する伝統医学病名である夜啼・驚啼に関して、中国・本邦医書での記載を検討し、『金匱要略』を原典として本来婦人臆躁に対して投与される甘麦大棗湯が両者に応用されるに至った起源を探索した。夜啼は中国・本邦いずれの時代の医書にも記載されていた。中国では『諸病源候論』からみられた驚啼は清朝以降みられなくなったが、本邦では江戸時代の古医方の提唱以来、医学古典の引用によって記述がみられ、和田東郭『百痰一貫』と有持桂里『稿本方輿輳』では驚啼に対する考察もみられた。夜啼に対する甘麦大棗湯の初見は両書であり「夜啼（中略）フト心付テ甘麦大棗湯ヲ用テ即効」とされた。現代でも甘麦大棗湯が夜泣き、睡眠時随伴症に投与されるのは江戸後期の折衷派が臨床応用した結果であると考えられた。

**キーワード**：夜泣き，睡眠時随伴症，夜啼，驚啼，甘麦大棗湯

### Abstract

Although kambakutaisoto was originally developed for treating women's hysteria in "Jinguiyao-lue," it is administered to children with night crying (Yatei) and fright crying (Kyotei, compatible with parasomnia) in contemporary Kampo medicine. This research aimed to determine the origin of this application by searching for descriptions of night crying and fright crying in Chinese and Japanese medical classics. Night crying was described in both Chinese and Japanese classics in all time periods researched. In China, fright crying was described from the age of "Zhubingyuanhou-lun," but it was not listed in medical classics from the Qing dynasty to the present day. In Japan, medical classics were emphasized during the rise of the Koho school in the Edo period, and fright crying was discussed in "Hyakuchin-ikkan" by Tokaku Wada and in "Kohon Hoyoge-i" by Keiri

Arimochi. Kambakutaisoto application was first observed in these two books with the statement "I came up with kambakutaisoto for night crying, which produced an immediate effect." Clinical experiences by the Sechu school appear to have contributed to the development of kambakutaisoto treatment for night crying and for parasomnia in the present day.

**Key words:** Night crying (Yatei), Parasomnia, Fright crying (Kyotei), Kambakutaisoto

## はじめに

小児の睡眠障害には夜泣き、睡眠中におきる「ねぼけ」行動の総称である睡眠時随伴症がある。現代医学では前者に対して主に認知行動療法、後者に対してクロナゼパムなどベンゾジアゼピン系向精神薬、三環系抗うつ薬、選択的セロトニン再取り込み阻害薬が選択されるが<sup>1)</sup>、効果が一定しないうえ向精神薬では有害事象が問題となり治療開始の閾値は高い。一方、東洋医学では夜泣きは夜啼、睡眠時随伴症である錯乱性覚醒や睡眠時驚愕症(夜驚症)は驚啼という病名で認識され、治療法は両者共通であるとされている<sup>2,3)</sup>。今日の小児漢方診療においても、夜泣き、睡眠時随伴症に対して甘麦大棗湯が奏効して即効性を示すことはよく知られている<sup>4)~6)</sup>。

しかし甘麦大棗湯は『金匱要略』下巻婦人雜病篇第22条文「婦人の蔵躁、しばしば悲傷して哭せんと欲し、かたち神霊のなす所の如く、しばしば欠伸す。甘麦大棗湯これを主る。」を原典としているように本来、婦人臍躁に対する方剤であり小児適応について直接的な記載はない<sup>7,8)</sup>。山口による夜啼治療の歴史的変遷の検討では、中国医書では隋・唐時代から小児診療に夜啼の記載がみられるが甘麦大棗湯は見られない一方、本邦では甘麦大棗湯は江戸時代に記載されており比較的新しい治療であることが示唆されたが<sup>9)</sup>、これまでに本邦および中国医書における夜啼・驚啼の記述に注目してその変遷を検討した研究はない。

本研究では中国および本邦医書における夜啼と驚啼の記述の時代的変遷について検討するとともに、本来臍躁に対する方剤である甘麦大棗湯が夜啼・驚啼へ応用されるに至った経緯を明らかにす

ることで、小児漢方診療史の一端を理解することを目的とした。

## 対象および方法

### 引用原典

清までの中国医書は『中国哲学書電子化計画』電子テキストを用いて『諸病源候論』(610)、『備急千金要方』(7c)、『顛頗經』(唐末期)、『小兒藥証直訣』(1119)、『幼幼新書』(1132)、『保嬰撮要』(1555)、『幼幼集成』(1750)を参照した<sup>10)</sup>。

『小兒藥証直訣』では『笈成資料庫』の電子テキストも参照した。現代中医学医書は中医児科学教材5版以降、9版(十二五規劃)までを参照した<sup>11)~16)</sup>。

本邦医書は『歴代漢方医書大成』<sup>17)</sup>と『臨床漢方小児科叢書』<sup>18)</sup>収載医書のうち1867年までに書写、発刊された文献で、「夜啼」や「驚啼」の記載がある全文を抽出した。両資料に含まれない文献として、丹波康頼『医心方』(984)<sup>2)</sup>と和田東郭(1744-1803)口述『百疾一貫』(刈谷市中央図書館村上文庫所蔵写本)を参照した。著者が同一である以下の文献は1書に代表させたため除外した(曲直瀬道三編『三婦廻翁医書』、多紀元簡校『広恵濟急方』、『傷寒論輯義』、中神琴溪口授『生生堂医譚』、有持桂里口述『校正方輿輶』、和田東郭『蕉窓雜話』、片倉鶴陵『静候堂治驗』、本間棗軒『癰科秘録』、『療治知要』)。『臨床漢方小児科叢書』収載医書のうち書誌情報を検討できなかったため以下の文献も除外した(山田道碩玄忠『小兒要訣』、塩瀬公祐『小兒諸病治法録』、吉田省庵『小兒一流奇効良方』、『家伝幼科精要』)。また中国医書の翻案、翻刻である『医方大成論詠解』、『和語本草綱目』、『神農本草經』も除外し

た。自序あるいは刊行年は『日本の医薬・博物著述年表(増訂版)』を元に記載した<sup>19)</sup>。今回検討した中国・本邦医書を年表にまとめた(表1)。

### 原典の条文と方剤の抽出

中国医書では「夜啼」「驚啼」「惊啼」を検索語に該当条文の記述を全て抽出した。本邦医書では、上述した方法で選択した原典から、「夜啼」や「驚啼」を含む条文および「甘麦大棗湯」を含む条文を全て抽出した。中国および本邦医書で夜啼に用いられる方剤を全て抽出した。本邦医書における夜啼と驚啼の記述変遷の検討では、伝統医学病名ごとに綱目分類された医書に限り検討した。夜啼に対する方剤の原典については、引用元の文献に記載された原典を参照しつつ、生薬内容から方剤名とその原典を再定義した。有持桂里口述『稿本方輿輳』の原文は、早稲田大学図書館所蔵、古典籍総合データベース収録デジタル画像資料『方輿輳』(請求記号ヤ 09 00589)より引用した。『校正方輿輳』の原文は『歴代漢方医書大成』収録の資料を参照した。『百痰一貫』と『稿本方

輿輳』の引用では原文の漢字、仮名遣いを尊重しつつ適宜句読点を付与した。

## 結 果

### 中国医書における夜啼と驚啼の記述の変遷

夜啼、驚啼の初見とみられるのは『諸病源候論』であった。『諸病源候論』巻47小兒雜病諸侯では103驚啼候(小兒驚啼者、是受於眠睡裡忽然而驚覺也。由風熱邪氣乘受於心、則心臟生熱、精神不定、故臥不安、則驚而啼也)、104夜啼候(小兒夜啼者、臟冷故也。夜陰氣盛、与冷相搏則冷動、冷動与臟氣相並、或煩或痛、故令小兒夜啼也。然亦有犯触禁忌、亦令兒夜啼、則可法術斷之)というように、夜啼と驚啼はそれぞれ独立した綱目で解説されていた。次代の『備急千金要方』巻11少小嬰孺方第4客忤では「小兒夜啼」綱の下位に、「治小兒驚啼方」として驚啼の記載が方剤解説の一条文として記載された。現存最古の小児科専門書である『顧頗経』では夜啼のみ記載されていたが、後代の『小兒藥証直訣』と『幼幼新書』では『諸病源候論』と同様に夜啼、驚啼

表1 参照医書の年譜

中国	西暦	日本
黄帝内経・神農本草経	前漢 B.C.	
傷寒論・金匱要略	後漢 3c	
諸病源候論	隋 610	
備急千金要方	唐 7c	
顧頗経	?	
	宋 984	平安
小兒藥証直訣	1119	医心方
幼幼新書	1132	
保嬰撮要	明 1555	安土
	1566	退齡小児方
	1574	啓迪集
	清 17c	江戸
幼幼集成(1750)	18c	切要方義(1659),家伝預葉集(1666),医方問余(1679),小児方鑑(1686),病名彙解(1686),小児必用養育草(1703),古今幼科摘要(1709),小児活法(1713),医療衆方規矩(1769),和方一万方(1781),小児医療手引草(1784),療治茶談四編(1791),治経験筆記(1795),方読辯解(18c),百痰一貫(19c),叢桂亭医事小言(1803),観聚方要補(1819),方輿輳(1829),生生堂中神家方書(19c),腹証奇覽翼(1834),春林軒撮要方(19c),保嬰須知(1848),喱科筌蹄(19c),内科秘録(1864)
中医兒科学教材 5版～	20c	

が独立した綱目で記載されていた。しかし『保嬰撮要』では巻4に夜啼門は見られたが、全巻を通じて驚啼門は見られなかった。巻1の抑青丸、補心散、[秘旨]補脾湯の方剤解説に「方見驚啼」と記載されているが、抑青丸は別綱にいわゆる抑肝散の丸剤として記載されているもののその条文に驚啼の語はなく、後二者はそもそも方剤解説が見当たらなかった。以上より現伝の『保嬰撮要』では本来あるべき驚啼門の記載が脱落している可能性が示唆される。清朝の『幼幼集成』では巻4に夜啼証治として夜啼門は見られるが、驚啼の語自体が見られなかった。以上の変遷を経て、睡眠障害の治療において『保嬰撮要』と『幼幼集成』の方剤を主に引用する現代中医児科学教科書では、雑病あるいは心肝病証に夜啼の綱目は見られるが、驚啼は見られなかった。

#### 本邦医書における夜啼と驚啼の記述の変遷

現存する最古の本邦医書である『医心方』巻25 小児篇は『諸病源候論』から総論を引用しており、92 治小児夜啼方と93 治小児驚啼方というように独立した綱目として記載が見られた。明の医学の影響を受けたと考えられる曲直瀬道三の『啓迪集』小児門では夜啼のみ記載されていた。表2に江戸時代以降の医書における夜啼と驚啼の記載をまとめた。名古屋玄医(1628-1696)の古医方の提唱以来、小児科専門書の方剤の多くは『傷寒論』『金匱要略』『備急千金要方』『小児薬

証直訣』『幼幼新書』など明朝以前の医書から引用されていた。夜啼はすべての医書に記載が認められたが、蘆川桂洲『病名彙解』(1686)で概説されているのを除き、驚啼は独立した綱目としてはみられず、主に古典方剤の条文中でのみ記載されていた。驚啼に対する言及が再び見られるようになったのは、古方派の台頭を経て古典が注目されるようになったと考えられる18世紀から19世紀にかけて、折衷派の和田東郭口述『百病一貫』と有持桂里口述『稿本方輿輳』においてであった。両書では方剤条文中においても驚啼の語が見られた。

#### 本邦医書における夜啼の治療

続いて、本邦の夜啼の治療内容の変遷に注目して今日の小児漢方診療で多用される甘麦大棗湯の起源を探索した。今回検討した本邦医書に解説される夜啼に対する方剤の出典を分類すると、グループ1) 経方(『傷寒論』・『金匱要略』、『黄帝内経』を原典とする方剤)、グループ2) 古典医論に由来する方剤(『諸病源候論』、『備急千金要方』、『外台秘要』)、グループ3) 宋から明朝までの中国小児科専門書や医学総合書に由来する方剤(『顧願経』、『小児薬証直訣』、『幼幼新書』、『保嬰撮要』など)と、グループ0) 本朝経験方(民間療法を含む)の4グループに分けられた(図1a)。図1bでは『啓迪集』以降、夜啼に用いられる方剤の原典を上記分類別に集計した。18世

表2 江戸時代の本邦医書における夜啼と驚啼の記載

世紀	西暦	著者	書名	対象	夜啼の綱目	驚啼:方剤条文に記載	驚啼の解説・考察
17c	1679	名古屋玄医	医方問余	一般	○	○	—
	1686	蘆川桂洲	病名彙解	一般	○	—	○
	1686	蘆洋	小児方鑑	小児	○	△(睡驚と記載)	—
18c	1703	香月牛山	小児必用養育草	小児	○	—	—
	1709	下津寿泉	古今幼科摘要	小児	○	—	—
	1713	松下元真	小児活法	小児	○	○	—
	1784	藤井見隆	小児医療手引草	小児	○	—	—
	1791	津田玄仙	療治茶談四編序	一般	○	—	—
	-	和田東郭口述	百病一貫	一般	○	○	○
19c	1803	原南陽	叢桂亭医事小言	一般	○	—	—
	1829	有持桂里	稿本方輿輳	一般	○	○	○
	1848	片倉鶴陵	保嬰須知	小児	○	—	—
	-	中川修亭	唾科筌蹄	小児	○	—	—
	1864	本間棗軒	内科秘録	一般	○	—	—

a. 方剤の出典分類			b. 夜啼に対する方剤									
原典	グループ	代表的方剤	本邦医書	西暦	グループ分類							
本朝経験方	0	甘連大黃湯	啓迪集	1566	■							
傷寒論	1	柴胡加竜骨牡蛎湯	切要方義	1659	■							
金匱要略	1	甘麦大棗湯	家伝預業集	1666	■	■	■	■	■	■		
千金方	2	紫円	医方問余	1679	■	■	■	■	■	■	■	
外台秘要	2	五味子湯	小児方鑑	1686	■	■	■	■	■	■	■	
顛頤経	3	虎睛丸	小児必用養育草	1703	■	■	■	■	■	■	■	
小児薬証直訣	3	花火膏	小児活法	1713	■	■	■	■	■	■	■	
幼幼新書	3	乳頭散	医療衆方規矩	1769	■	■	■	■	■	■	■	
太平惠民和劑局方	3	助胃膏	和方一万方	1781	■	■	■	■	■	■	■	
世医得効方	3	加味通心飲	小児医療手引草	1784	■	■	■	■	■	■	■	
保嬰撮要	3	人參黃連散	方読辨解	18c	■	■	■	■	■	■	■	
医学入門	3	金箔鎮心丸	療治経験筆記	1795	■	■	■	■	■	■	■	
本草綱目	3	黒牽牛	百疾一貫	19c	■	■	■	■	■	■	■	
万病回春	3	鎮驚丸	叢桂亭医事小言	1803	■	■	■	■	■	■	■	
			觀聚方要補	1819	■	■	■	■	■	■	■	
			稿本方輿輓	1829	■	■	■	■	■	■	■	
			生生堂中神家方書	19c	■	■	■	■	■	■	■	
			腹証奇覽翼	1834	■	■	■	■	■	■	■	
			春林軒撮要方	19c	■	■	■	■	■	■	■	
			保嬰須知	1848	■	■	■	■	■	■	■	
			内科秘録	1864	■	■	■	■	■	■	■	

1マスが1方剤に対応する

図1 本邦医書に記載される夜啼に対する方剤

紀まではグループ3の方剤がほぼ全てを占めており、グループ1を原典とする方剤は見られなかったが、19世紀以降ではグループ1、2の割合が増加した。甘麦大棗湯は『金匱要略』を原典としており、グループ1の方剤が見られる『百疾一貫』と『稿本方輿輓』に以下の検討では注目した。興味深いことに、この二書は上述した本邦医書の検討で驚啼に対する言及が見られた医書であった。

### 夜啼、驚啼に対する甘麦大棗湯の起源

『百疾一貫』と『稿本方輿輓』の両書において、夜啼および驚啼に対する治療に言及した部分を抽出した。

『百疾一貫』巻中第3小児では「小児夜啼ト云ヘキニ昼夜不止シテナクアリ。初毒トシテ甘連加虎<註：大黃>ニ紫円ヲ兼用シ或參連加辰ヲ用テ不止。先生フト心付テ甘麦大棗一ヲ用テ即功アリ。ソレヨリ小児啼不止モノハ皆此方ヲ用、胎毒ノ候アルモノハ紫円ヲ兼用スル也。小児驚啼ニモ此方効アリ。本方小麦ナレトモ芽最良シ。」と記載されていた。また『稿本方輿輓』巻4夜啼・客

忤では、「方書ニ夜啼ト驚啼トヲ分テ二門ニシテアレトモハ差別スルニ不及。」「甘麦大棗湯。一小児昼夜啼クアリ。初メ毒トシテ甘連加大黄ニ紫丸ヲ兼用シナトシテ効ナシ。余フト心付テ甘麦大棗ヲ用テ即効ヲ見シコトアリ。胎毒ノ候アル者ハ紫丸ヲ兼用スル也。此方本方ハ小麦ナレトモ小麦芽ヲ用ルカ良也。」と『百疾一貫』とほぼ同文の記載が見られた。いずれにおいても、「心付テ」甘麦大棗湯を用いるとあり、夜啼に対する甘麦大棗湯の起源であることが示唆された。

また『百疾一貫』と『稿本方輿輓』にはいずれも「小児夜中ニ、フト起テ家内ヲメグリアルキ、又フトシテ寢床ヘ入テネイリ翌日其コトヲ知ヌ（中略）此ラノ症、男女トモニ甘麦大棗湯ユク処ナリ。」とほぼ同文の記載があり、睡眠時随伴症の一つである睡眠時遊行症（夢遊病）と思われる症候に対しても甘麦大棗湯が応用されていた。なお以上の方輿輓における記載は『稿本方輿輓』にのみ見られ、『校正方輿輓』には見られなかった。

## 考 察

歴代医書に見られる夜啼と驚啼の検討では、病名「夜啼」は中国・本邦医書に常に見られていたが、中国において隋代から見られた病名「驚啼」は清代以降失われて現代中医児科学に継承されている一方、本邦では江戸中期以降、古医方の隆盛により古典に記載の「驚啼」が残されたと考えられた。また夜啼に対する甘麦大棗湯の応用についての検討では、『百痰一貫』と『稿本方輿輳』のいずれにも「夜啼(中略)フト心付テ甘麦大棗湯ヲ用テ即効」と記載されており、夜啼に対する甘麦大棗湯の起源であることが示唆された。同時に中国医書には記述されていない睡眠時遊行症と考えられる症候に対しても甘麦大棗湯が本邦では応用されていた。

今回検討した中国医書では、清代の代表的小児科書『幼幼集成』で「驚啼」の病名が全く記載されず、本書を多く引用する現代中医児科学教科書にも同様に「驚啼」がみられなかったことは注目される。明代の小児科書『保嬰撮要』では何らかの理由により驚啼門が脱落したことが示唆されたが、それを後代の小児科書が継承して「驚啼」の解説をしなかった可能性がある。また『稿本方輿輳』に「方書ニ夜啼ト驚啼トフ分テ二門ニシテアレトモ是ハ差別スルニ不及」とあるように、「夜啼」と「驚啼」の病態は共通点が多いため「夜啼」に集約されて解説された可能性もある。本研究で参照した少数の中国医書では「夜啼」と「驚啼」を直接的に比較検討した記述が見られなかったことから、「驚啼」が清代の医書に記載されなかった要因を特定するには、より多数の文献を検討することが必要である。

甘麦大棗湯は甘草、小麦、大棗の3生薬からなる簡素な方剤であり、いずれの生薬も補虚作用を持つ。小麦は甘、微寒で帰経は心・肝であり、20gと大量で君薬である。養心除煩作用に優れて、心神を養い安定作用がある。甘草は5gと漢方エキス製剤のなかでは芍薬甘草湯や甘草湯について甘草含有量が多い。味は甘、性は平、帰経は心・肺・脾・胃で、補気心脾、養心安神するほ

か緩急(止痛)作用も見られる。エキス製剤では生甘草が用いられておりやや涼性で清熱解毒作用も持つと考えられる。大棗は甘、温、帰経は脾・胃で、補気健脾のほか、甘草に比べて養血作用に優れる<sup>20)</sup>。合わせて甘麦大棗湯は養心安神、柔肝緩急に働き、心陰受損、肝気失和・臓躁を主治としている<sup>21)</sup>。甘麦大棗湯の原典は『金匱要略』下巻婦人雜病篇第22で「婦人の蔵躁、しばしば悲傷して哭せんと欲し、かたち神霊のなす所の如く、しばしば欠伸す。甘麦大棗湯これを主る。」と記載されている<sup>8)</sup>。婦人蔵躁は今日、臓躁と表記され、元来虚証であるところに精神的ストレスにより、肝気鬱結して心神が養われないことにより生じる種々の精神症状とされている<sup>20) 22)</sup>。投与目標の症状には精神症状として情緒不安定(発作的怒りや悲哀、よく泣く)の他に、生あくび(欠伸)、睡眠が浅いということがあり、後二者はいずれも睡眠障害に関連する症状であることから、小児の睡眠障害である夜泣き、睡眠時随伴症に甘麦大棗湯が奏効することの病態の類似性を検討する研究が待たれる。

今回検討したのは江戸時代までの文献であるが、後世の明治期の漢方医学書の夜泣きの治療にも甘麦大棗湯の記述が引き継がれている。浅田宗伯『勿誤薬室方函口訣』では「此方ハ婦人蔵躁ヲ主トスル薬ナレド(中略)又小児啼泣止マザル者ニ用テ速効アリ。(中略)客忤ハ大抵此方ニテ治スルナリ。先哲ハ夜啼客忤、左ニ拘攣スル者ヲ柴胡トシ、右ニ拘攣する者ヲ此方トスレドモ泥ムベカラズ。」と記載されているように<sup>23)</sup>、甘麦大棗湯が小児の泣き止まないものに速効性があることや、夜啼・客忤に柴胡剤との鑑別で腹証に拘らずに甘麦大棗湯を用いてよいとしている。ここに「先哲」とあり、過去の文献からの引用を元に治療経験例を提示していると考えられるが、今回検討した文献では腹証による甘麦大棗湯と柴胡剤との鑑別に言及したものを検索できなかったため、今後の検討が必要である。明治期の漢方三大家の一人であり、小児科診療に優れていた村瀬豆洲の小児科専門書『幼幼家則』時之巻・初生雜病門に、夜啼と驚啼が並列して記載されており、本邦

医書における夜啼と驚啼の記述の歴史を踏まえたものと考えられる。本書で夜啼に使用する方剤は『小兒藥証直訣』の花火膏など時方を原典としたものが主であるが、頭注に「小兒夜啼劇者、与甘麦大棗湯、捷効不可不知。」と甘麦大棗湯の応用が記載されており<sup>24)</sup>、江戸時代からの応用が継承されていると考えられる。昭和期の漢方医学では、大塚敬節『症候による漢方治療の実際』2.不眠 13.芍薬甘草湯・甘麦大棗湯で夜泣きの治療について言及しており「これらの薬方は乳児の夜啼きに用いて、まことに著効のあるもので、服薬したその日から夜啼きのやむことが多い。多くは芍薬甘草湯で奏効するが、これを用いて効のない時は、甘麦大棗湯、抑肝散などを用いる。」というように芍薬甘草湯、甘麦大棗湯、抑肝散を用いることが記載されている。また同書 9.精神異常 12.甘麦大棗湯で、「小児が夜中にふと起きて家の内を廻りあるき、またふとして寢床に入って眠り、翌日、そのことを知らないことがある。これ等の症は、男女ともに甘麦大棗湯のゆくところである。」と本研究で検討した『百疾一貫』を引用するかたちで睡眠時遊行症の治療を述べている<sup>25)</sup>。現代の小児漢方診療で夜泣きに甘麦大棗湯を用いるに至ったのには、このような昭和漢方の文献の直接的影響があるのかもしれないが、その起源は江戸期の臨床経験であると考えられる。本研究の限界は以下の通りである。『臨床漢方小兒科叢書』では目視で条文と方剤を抽出しており、情報バイアスの可能性は否定できない。電子テキスト化された『歴代漢方医書大成』で全文検索をした範囲では、甘麦大棗湯の起源を『稿本方輿輳』以前のテキストで見つけることはできなかったが、『百疾一貫』のように『歴代漢方医書大成』に収載されていない医書に夜啼・驚啼に対して甘麦大棗湯を応用した記述がある可能性は否定できない。より多くの小児医療関連医書を電子テキスト化するとともに網羅的にテキスト検索する機能を付与することが、今後の小児漢方診療の歴史を明らかにするための研究に必須である。

## まとめ

金匱要略を起源とする甘麦大棗湯が今日まで小児夜泣きや睡眠時随伴症に投与されるのは、古医方の提唱により古典医学書が注目される中、18、19 世紀の折衷派が臨床応用した結果であると考えられた。

以上の内容の一部は、第 44 回日本小児東洋医学会(千里、2016 年 9 月)で発表した。

本研究は JSPS 科研費 JP16K19311 の助成を受けたものである。

本研究に関して開示すべき利益相反はない。

## 参考文献

- 1) Stores G. Aspects of parasomnias in childhood and adolescence. Arch Dis Child 94: 63-69, 2009.
- 2) 丹波 康頼, 榎 佐知子. 医心方. 筑摩書房, 東京. 1993.
- 3) 有持 桂里, 八谷 文恭. 方輿輳. 写本.
- 4) 川嶋 浩一郎. 小児の心身発達を促す気血水の漢方と臨床. 日本小児東洋医学会誌 29: 60-70, 2016.
- 5) 川島 希. 小児長期入院患者の夜泣き・夜驚症に対する甘麦大棗湯. 日東医誌 67: 256, 2016.
- 6) 村社 歩美, 鈴木 順造. 夜泣きに対する漢方薬治療の効果に関するアンケート調査結果. 漢方医学 37: 229-231, 2013.
- 7) 真柳 誠. 漢方一話 処方名のいわれ 67-甘麦大棗湯. 漢方診療 18: 4, 1999.
- 8) 日本東洋医学会傷寒金匱編刊小委員会. 傷寒論・金匱要略: 善本翻刻. 日本東洋医学会, 東京. 2009.
- 9) 山口 英明. <夜啼>に対する治療方剤の史的変遷. 日東医誌 58: 174, 2007.
- 10) Chinese Text Project [cited 2017 Jan 1, 2017]. Available from: <http://ctext.org>.
- 11) 江 育仁, 田久和 義隆. 全訳中医小児科学: 中医薬大学全国共通教材. たにぐち書店, 東京. 2013.
- 12) 汪 受傳. 中医儿科学. 2 ed, 中国中医药出版社, 北京. 2002.
- 13) 苏 树蓉. 中医儿科学. 人民卫生出版社, 北京. 2003.
- 14) 汪 受傳. 中医儿科学. 2 ed, 中国中医药出版社, 2007.
- 15) 汪 受傳, 虞 坚尔. 中医儿科学. 中国中医药出版社, 北京. 2012.
- 16) 马 融, 韩 新民. 中医儿科学. 2 ed, 人民卫生出版社, 北京. 2012.
- 17) 歴代漢方医書大成電子版. 西岡漢字情報工学研究所 新樹社書林 (販売), 2008.
- 18) オリエン特臨床文献研究所. 臨床漢方小兒科叢書. オリエン特出版社, 大阪. 1997.

- 19) 真柳 誠. 日本の医薬・博物著述年表 (増訂版) [cited 2017 Jan 1]. Available from: <http://square.umin.ac.jp/mayanagi/paper01/ChronoTabJpMed.html>.
- 20) 三浦 於菟. 実践漢薬学. 新装版 ed, 東洋学術出版社, 千葉. 2011.
- 21) 神戸中医学研究会. 中医臨床のための方剤学. 医歯薬出版, 東京. 1992.
- 22) 篠原 明德. 「臍躁」の1例. 伝統医学 4: 95-97, 2001.
- 23) 長谷川 弥人. 勿誤薬室「方函」「口訣」釈義. 増補改訂版 ed, 創元社, 大阪. 2005.
- 24) 村瀬 豆洲. 幼幼家則. 杏雨社, 東京. 1885.
- 25) 大塚 敬節. 症候による漢方治療の実際. 南山堂, 東京. 1963.